

境界線と構図の更新

——梅崎春生「囚日」「偽卵」「黄色い日日」論

渡部裕太

1、三作品の展開

「囚日」といふ作品は、私の身近に起つた事象に取材して書いた。もつと長く、百枚程度に始めは書くつもりであつた。しかし書いてゐるうちに、書いてゐる自分に嘘を感じ始めてきたので、どうしてもあそこまでしか書けなかつた。材料が重かつたのではなく、自分が信じられなかつたからである。その感じを含めて、同じ材料で、「偽卵」を書き、やはりひどく意に満たなかつた。すべてがぴつたりしなかつた。その気持や条件を裏返したら書けるのではないかと思ひ、「黄色い日日」を書いたが、これも私には満足でなかつた。そして私はこの材料を放棄することに決めた。書いてもまた別の迷路に入る予感がしたから。

こんな具合に、身近なものでも、私にはうまく書けない。

以上は、単行本『ルネタの市民兵』のあとがきでの梅崎春生の

言葉である。^①ここで梅崎は、自身のスランプについて語っている。「偽卵」は一九四九年一月「知識人」に、「囚日」はその三ヶ月後の一九四九年四月「風雪」別冊に、「黄色い日日」は翌五月「新潮」別冊に発表された作品である。が、先に引いた本人の言及を確認する限り、「囚日」「偽卵」「黄色い日日」の順で執筆されたと考えて良いだろう。本稿においては、その執筆順での考察を行う。

この三作品をひとまとまりとしてみる先行論として、戸塚麻子の論考がある。^②戸塚は「偽卵」、そして続く「囚日」、「黄色い日日」では日常の倦怠感が描かれている」とし、「日常の倦怠感から如何に脱出するかを問いつつも、しかし、その方途は絶対的に閉ざされているのだと結ばざるをえなかつたのであり、このモチーフを変奏しながら繰り返していくことになる」と論じている。

また、その「倦怠感」は描写によつて表明されているとして、「語り手の視点は「動かない」ものとして固定化」され、「外部の現象は全て「枠のなか」の映像のように、「私」とつながりえないものとして強く意識される」と指摘している。

また、三作品のまとまりではないが、木村功は「囚日」「黄色い日日」を連作として取り上げ、梅崎の「神経症」と結びつけて論じている。^③木村は「囚日」について、「私」は、精神病院や刑務所と、それらを社会の「外部」として排除したところに成立しているこちら側の社会が、実は「外部」と同様に〈お互いに無関心で生きているという相似〉形を描いていることを発見し、そこに共通する〈ひとりひとりが他からは理解されない世界を、ひとつずつ内包している〉〈ばらばら〉な状態を、こちら側とあちら側の連続性として指摘してみせている」として、「〈無関心〉の相似形の発見は、精神医学と病院というイデオロギー装置によって截然と区分されているはずの正気（こちら側）と狂気（あちら側）の境界が実は不分明であるということを示唆しており、こちら側とあちら側という区画を設けてあちら側を差別する制度の暴力性が暴かれることになる」と説明する。また「黄色い日日」においても「〈無関心〉のモチーフ」は連続するとし、両作品は「健康」な者と「病んだ」患者の境界の曖昧さを浮かび上がらせ、それにもかかわらず観察するもの（社会・健康）と観察されるもの（患者・病気）を析出してやまない精神医学の言説・イデオロギーの暴力性を提示している」として、「戦後〈ばらばら〉になった日本社会の人間関係を問題として提示しながら、精神病患者という〈他者〉を析出しつづける戦後の精神医学的言説そのものを相対化する試み」であったと論じている。

三作品の紐帯となっているのがスランプについての言説であるためか、これまでは三作品の共通点を強調し各作品の細部を捨象することで、梅崎自身の問題と接続するような考察が行われてき

た。だがその際に真に重要なのは、「囚日」執筆中に「自分が信じられ」なくなつたという問題に対し「偽卵」で再検討を計り、更に翻案して「黄色い日日」へと向かう、その試行錯誤の過程そのものを明らかにすることである。三作品に共通する問題はむしろ変更の必要性がなかった「材料」であり、「偽卵」や「黄色い日日」にて加えられ、あるいは削り取られていく諸要素にこそ、梅崎の問題意識へと接続する可能性が含まれるのではないだろうか。

本稿では、各作品の精読を通じて、「囚日」から「偽卵」へ、そして「黄色い日日」に至るまでの翻案と変更とを明らかにする。連作として一括りにされてきた作品群を切り分けることで、変奏曲のような繰り返しの中に表れた試行錯誤の様相へと焦点化することを目的としたい。

2、「囚日」——社会规定的境界線

「囚日」は、「私」が「脳病院」を見学する場面から始まる。

「私」と「私の連れ」とは、「水野国手」に案内されながら「脳病院」をみてまわる。いくつかの病棟をみてまわるうち、「私」は次第に、「私たち」と「患者」との見分けがつかないことが気になり始める。

「私」ははじめ、「脳病院」で患者をみてまわり、「私たちの世界」とは別の世界として明確に切り分けていた。廊下のおいや病室の構造から「動物の檻」を連想していたが、一方で「狂つてゐる」のが患者か自分か判らなくなるような錯覚にも囚われてお

り、「私」が正常で患者が異常、というような定式的なとらえ方ではなく、ただ隔てられた存在として患者をみていた。

ところが一通り見学した「私」は患者と看護人の見分けがつかなくなっている。そして自分も同じように他者から患者として見られる可能性を心配するが、他者にどう見られるかを気にしているのは「私だけ」だとされる。この、「他からはどう見えるか」を気にしている、という一点において「私」は患者からは隔てられ、「つめたく澄んだ無関心」のなか「自分の世界にとちこもつてゐる」患者との差異が強調される。「私」は、「狂人」と正常との区分を揺るがされ、それに対して自身と患者とを切り離す差別化の定義づけを行いはじめるのである。

その後もいくつかの病棟をまわる「私たち」は、「亡友の死霊」に憑かれた、という患者の男に出会う。その男の被っている蒲団の布地の模様をみて、「私」は「――ああ、あれは石狩の蒲団と、おなじ模様ではないか!」と、強盗をおこなって逮捕されている友人「石狩」のことを連想する。

「私」の関心と視線とは、患者の男と蒲団の布地の模様とに同等に注がれ、「私」は石狩の蒲団を売りにいったときのことを思い起こす。無論、患者の蒲団と石狩の蒲団とが同じ模様であったことは偶然であり、布地も麻葉模様とそう珍しいものではない。そのありがちな偶然が「つよく私の心を射た」ことから、精神病患者と石狩とを結びつける「私」の発想がはじまっている。

自身と「狂人」を切り分けようとする「私」は、この偶然によって、石狩と患者とを結びつけるようになる。偶然性の影響力はこのあたとも「私」に対して強力に作用するが、これはドラマ

ティックな事象の一致ではない。ありがちで、気にせずに捨て置く方がむしろ自然ですらあるような、牽強付会的な偶然性である。⁽⁴⁾病棟の見学の最後に、案内していた「水野国手」は「私の連れ」に、「精神病と言ふと、なにかも僕らと違ふと、君はかんがへてゐるんだらう」と語り、その認識の誤りを指摘する。

水野のそのことばに「楳衡に似た感じ」を受ける「私」は、患者を「なにかも僕らと違ふ」存在だとして切り離して考えようとしてきた。そこに投げられた水野のことばは、「私」が定義してきた彼私の境界を、医学という学問的な、確かな立場から揺るがしてしまふ。木村の論じる通り、「こちら側とあちら側という区画を設けてあちら側を差別する制度の暴力性」は「私」のありかたとして明確に押し出されているが、ここではむしろ「戦後の精神医学的言説そのもの」こそが「こちら側」と「あちら側」とを融和させる。木村の言う「イデオロギーの暴力性」は「私」による差別化の努力にこそ表れる。それは、精神病への無知と偏見のイデオロギーなのである。

見学を終えて立ち寄った喫茶店で「私」は喫茶店の客同士が「お互ひにつながりを持たぬ人々」であることに気が付く。木村が「(無関心)の相似形の発見」と指摘している通り、喫茶店の客の無関心のありようを見た「私」は、「狂人」と正常との境界線を見失う。その境界の喪失によってはじめて、「私」は自身と患者との間に共通点をみつけれようになる。

さうだ、と私はとつぜん思ひ出した。あの男の口調が、なにか心にからみついてゐたのも、私の故郷の訛りがそこにあ

つたからであつた。実際に聞いてゐたときに、なぜ私はそれに気が付かなかつたのだらう。あの時、鼓膜にだけとどまつてゐたものが、今になつて意識にのほつてきたのは何故だらう。

「狂人」と石狩の蒲団の布地という偶然の符合には直ぐに気が付いた「私」は、一方で自身と患者の故郷の訛り、というより大きな偶然の一致には気が付かなかつた。犯罪者として隔離されている石狩と「狂人」として隔離されている患者とは、そのどちらもが社会から隔てられた存在として「私」に認識されていたがために容易に結びつけられていた。「狂人」と喫茶店の客との符合によつて境界が崩れたときに初めて、患者の男は「私」と同郷の男として強烈に関連づけられるのである。

こうして、「強盗」と「狂人」と「私」とを区切る境界は、偶然の一致によつて取り払われた。それに耐えられない「私」は、自身と両者とのあいだに、あらたな線引きをおこなおうとする。

——脳病院だつてあの喫茶店だつて、似たやうなものさ。

人混みを縫つて駅の方にあるきながら、そんなことを私は思つた。その中にある人たちが、お互ひに無関心で生きてゐるといふ相似を、私はあの日も感じてゐたのであつた。無関心で生きてゐるといふのも、ひとりひとり他からは理解されない世界を、ひとつづつ内包してゐるせめなのだらう。その世界がだんだん歪んできて、この世の掟や約束を守れなくなると、人は脳病院に入つたり、刑務所に入つたりするのだ

らう。

「ひとりひとりが他からは理解されない世界を、ひとつづつ内包してゐる」という「相似」を「私」は自身と患者と石狩とに認めてはいる。一方で、「この世の掟や約束」を守れるかどうか、という新たな境界を設定し、「私」は自身と両者との差別化の試みを再度おこなっている。木村が言うように「脳病院」や「刑務所」は隔離のための「イデオロギー装置」として機能している。だが、その制度の暴力性を「諷して」いる、というよりはむしろ、制度による線引きが無化されると同時に、今度は「私」自身が「この世の掟や約束」というイデオロギーを代表しはじめるのだ。

この新たな定義をおこなうまでのあいだに、「私」は、石狩の身辺整理をおこなっている。その描写を追うことで、「この世の掟や約束」を基準とした差別化の結末をみていきたい。

病院見学をおこなう前日、「私」は刑事から、石狩が保釈を希望しているとの電話をうけ、「はげしい昏迷のやうなもの」を感じ、「真をいらいと吸ひつけ」ている。

保釈を望む石狩に対して「私」が抱く「いらいら」の正体を明らかにしていくように、物語は更に過去へと遡つて展開する。「私」は石狩の書いた小説を思い出し、それらに「ほとんど生理的な暗さに満ちてゐた」「出生のくらさを底に秘めてゐるやうであつた」「光からわざと自分をしめ出すやうな作品」との評価を与える。ここで「出生のくらさ」とよばれているのは石狩の両親が盲目であるということであつて、「くらさ」はそのまゝ視界の暗さの意

味と、犯罪行為に走るような石狩の「生理的な暗さ」の意味とが掛け合わされている。「私」は石狩の犯罪と、彼の両親の障碍とを同列に「くらさ」とみているのである。

さらに「私」は、石狩の「くらさ」と「脳病院」の患者のイメージとを、「ほとんど外界の反応をみせない分裂病患者をみたとき、私がすぐ思ひうかべたのは、深夜の部屋に座つて、壁をながめてゐる石狩のすがたであつた」と語ることと重ね合わせる。

石狩はこうして、身体的には「盲人」の両親と、精神的には「分裂病患者」と深く紐付けられる。現代からみたときに当然指摘されるであろう「私」の差別意識は、「視力の欠けた者同志が、一緒になれるものかどうか」ということばにも表れるように、「脳病院」患者のみならず視覚障碍者にも向けられているが、そのことに対する批判は今回は措く。ここで問題にしたいのは二点、まずは、「私」が石狩をどのように位置づけ、「私」とは隔てられた者としておこうと試みている点であり、もうひとつは石狩を通して「盲人」と「分裂病患者」とを結んだ結果、「私」の設定した「この世の掟や約束」という定義が再度崩壊する結末を迎える点である。

はじめに挙げた、「私」が石狩を隔てた存在におこうとする試みから追つていきたい。

私は即日、刑事に立合ひをたのみ、追つかけられるやうに一切を古道具屋に渡してしまつた。さうすることによつて、石狩がおちた罌の食ひ目を、更に決定的にするかのやうに。すべて断ち切らせることで、彼の不幸が不幸でなくなるかも知

れぬと、気持の表面だけでそのとき私は考へたが、しかもその足で、私は郵便局に行つて電報を打つたのであつた。

即日蒲団まで売り払い、保釈の願いをきいて「いらいら」する「私」は、逮捕された石狩と「私」の生活する社会とを徹底的に切り離し、石狩を犯罪者として「私」から遠く離しておこうとしている。その行動を、「すべて断ち切らせることで、彼の不幸が不幸でなくなるかも知れぬ」と考える「私」は、石狩の「くらさ」の根源である彼の両親に対しても電報を送つて罪を知らせる。

「私」が想像した「別の身の果て」は、「逃げればよかつた」という石狩の小説の文句を参照すれば逃走だろうが、その可能性を潰すかのように、「私」は両親に知らせを送つてしまっている。即座に蒲団を売り払つたこと自体は、石狩の本意ではなかつたとしても本人の言葉通りの行動である。一方で両親への電報は、石狩の願いを真つ向から無視した私の独断であつた。

石狩がいま避けようとしてゐる実家とのつながりを、この電文が一挙にむすびつけてしまふのだと、私は考へた。あるひはこれが、彼の唯一の救ひになるのかも知れない。しかしさう思うことは、私にひどく苦しかつた。自分で嘘をかんがへてゐると思つた。そして自分がそのつながりの中にあることが、私の心を重くした。私の気持は、ひどく退屈してゐるときの感じにそっくりであつた。

前述の通り、「私」は石狩の「くらさ」の根柢に、彼の両親の

障碍をみている。そして「私」は自身を「脳病院」の患者や犯罪者と区別する、という目的で、石狩と社会とを隔絶するべく「この世の掟や約束」というイデオロギーを代表するように行動している。「私」にとつて、「盲人」である石狩の両親は「私」のいる社会の側ではなく、「分裂病患者」や強盗と縁づけられた、隔絶した存在として捉えられているのだ。「家に知らせるな」という石狩の願いは、犯罪者である石狩と、「北陸のちひさな町」で暮らす両親とを断絶したままにし、両親を社会の側におこうとすることばであつた。「私」には、石狩の引こうとするその境界線は許容できないのである。

そうした判断と行動を、「私」は「彼の唯一の救ひになる」と考える。「自分で嘘をかんがえてゐると思つた」にもかかわらず、その石狩への裏切りともとれる行為を止めることはない。「私」は自身が正常であるとの確信を持ち続けるために、「追われるやうに」すべての行為をすすめるのである。

このとき無視された「自分で嘘をかんがえてゐる」という意識は、「ひどく退屈してゐるときの感じにそっくり」だとされ、そのまま「偽卵」にも引き継がれていく。

さて、「私」が石狩を社会から隔絶した者としようと試みたことは確認した。ここからは、その結果取つた行動によつて、「この世の掟や約束」という定義が再度崩壊する、結末部を辿つていきたい。

——点字電報だ、と私は直覺した。とたんに身体のごくかがばらばらに散らばるやうな不快な感覚が、私をはしつて抜

けた。それは石狩の母親にちがひなかつた。そしてそれが、石狩の父親からの電報であることがすぐ胸にきた。すると紙の上にちらばつた点々が、急におそろしいものとして、私の眼にせまつてきた。老女の細い指が、確かめるやうにそこを動いた。

（このまま、帰つてしまはうか。石狩に会ふのはこの次にして——）

麵麴のつつみを握つたまゝ、私はさう考へた。ひとつの帰決をかういふ形で見るのが、私に堪へ難い感じを起させたのであつた。ある無残な感じが、凝結してそこにあつた。しかしそれは私の罪でもなければ、誰の罪でもなかつた。老女の盲ひた横顔から眼をそむけて、私は身体をうしろにずらした。

作者自身が「あそこまでしか書けなかつた」と語る、「四日」の結末部である。

石狩に呼び出された「私」は、道中「この世の掟や約束を守れなくなると、人は脳病院に入つたり、刑務所に入つたりするのだらう」と考えながら、面会のために警察に向向く。刑事に取りはからつてもらうために向かつた刑事部屋には石狩の母親が来合せており、偶然その手に握られていた点字電報は、「私」に「おそろしいもの」として迫ってくる。

石狩の母親が上京してきたのは間違ひなく「私」の電報が原因である。そして「私」は、「どうやつて読むのだらう」と思ひながらも、点字電報ではなく通常の電報を送つていた。「私」にとつ

て「盲人」は、犯罪者らと同じく突き放す対象であり、自身と同じ社会の側ではなかった。点字電報を読む石狩の母親に行き会ったとき、その点字は、反対に「私」を突き放す読解不能な言語として立ち現れ「私」に迫る。「私」が社会から隔てられた者として突き放して考えてきた石狩の両親は、電報でやりとりし東京へと単身上京する確固とした社会の成員として刑事部屋のなかに居り、「私」は彼等のコミュニケーションからはじき出された存在として「閾」を跨げないまま「身体をうしろにずら」さざるをえない。

「私の罪でもなければ、誰の罪でもなかった」と「私」に語らせるこの状況は、「私」の電報が生み出したものである。石狩の願いを無視し「嘘」をつくような気分で電報を送った「私」は、「この世の掟や約束」を守れない存在として、つまり今まで差別的にみてきた犯罪者や「脳病院」の患者とおなじ者として、その「罪」を突きつけられている。「私」に「罪」を自覚させる点字電報から、「身体をうしろにずらし」て「私」は「逃げ」出すのである。

石狩の母親の読んでいた点字電報は、「私」が精神病患者や犯罪者と自身とを切り分けるために設定した定義に則り、「私」の行為を断罪する。「囚日」では、「私」のまわりに起こる偶然は、幾度も「私」の正常さを問い直し、「私」は「嘘をかんがえ」てでも境界線をひきなのおそうとする。また「嘘」の意識は「退屈」として表れている。結末部で「私」は「嘘」を考えることなく逃走し、物語は「あそこまでしか書けなかった」まま閉じられるのである。

3、「偽卵」——自己決定的構図

「囚日」において、点字電報は「私」の眼には読めない言語のかたちとして立ち現れ、「私」を断罪した。この、眼についての特権的な性質は、大きくかたちを変えながらも「偽卵」に引き継がれる。

「偽卵」の物語は、石狩の裁判の傍聴に向かう途中、空腹の「私」が瀬戸物屋で卵を見つけるも、手に取ってみると粘土製の偽卵だった、というエピソードからはじまる。

「私」は偶然偽卵を購入したことで、本物の「卵を買ふ気持」を失っている。卵に対する欲望は、偽物の卵によって代替された、とも言えるが、一方で空腹そのものは当然埋まらない。卵そのものでなく似たような「なにか」で腹を満たしたいという「擬似めいた食欲」へと置き換わっている。

「囚日」において「私」の自己認知を揺るがせ続けた偶然性が、「偽卵」においてはそのタイトル通り、本物／偽物を切り替える機能を設定されていることが冒頭のエピソードから示唆されている。

空腹の「私」は電車を待ちながら、従軍中に知り合った「牛を見ると食欲を感じるといふ」「元屠殺業者」のことを思い出す。

相手が牛にしたつて何にしたつて、ある確実な何かで眺めるといふことは、大したことだ。さう思ひながら、私はほんやり歩廊から牛の姿を眺め、屠殺業者の風貌を思ひ起してゐ

た。あの屠殺業者の眼にのりうつれば、あの牛の姿も、私のなにかをかきたててくるのかも知れない。……

ひどく退屈に似た気分におちこみながら、私は掌の偽卵をポケットにすべりおとす。

牛を見て食欲をかきたてられる屠殺業者の男の眼で見られたものは、見る者の「なにかをかきたててくる」。「私」はその視線に「のりうつ」ることを想像するが、「ひどく退屈に似た気分におちこ」むことになる。

このとき「私」は、自身のなかに「ある確実な何か」が無いことを意識している。「囚日」においては、その空白に「この世の掟や約束」というイデオロギーが挿入されることになったが、「偽卵」においては、そこに視線という新たな問題が付け加えられるのだ。

また「退屈」という感情は、「囚日」では「嘘」の意識と同義として使われていた。「偽卵」においてもそれを適用すれば、他者の「眼にのりうつ」る試みが、「私」によって「嘘」として否定されている、と言い換えられるだろう。当然、他者の眼にのりうつり何かを眺める、という憑依じみたオカルティックな試みは現実的とは言いがたく、そのことが「私」の「嘘」の意識として表現される。だが石狩の法廷に着いたのち、「私」はこの視線の「のりうつ」りを、偶然を起点として実際におこないはじめるのである。

法廷で、「私」は傍聴席に麻子をみつけ、後ろから観察する。

——麻子は石狩の横顔に、なにを見てゐるのだろうか？

瞬間眼の前で白っぽい光が吹きはらはれるやうに動いた。

私は石狩のふとい首筋を、そこにみだれる頭髪やよごれた生毛を、ざらざらに立つた毛穴を見た。また襟あかに黒ずんだ上衣や、そこにただよふ体臭をかんじた。それは突然私にやつてきた。倒錯した快感のやうなものが、私のなかを一瞬通りぬけた。それは苦痛にも似てゐた。私は身ぶるひしながら、麻子の方を見た。ぎよつとしたやうにこちらをむいた麻子の眼と、私の視線は合つた。

「麻子は石狩の横顔に、なにを見てゐるのだろうか？」と考えていた「私」に、「苦痛にも」似た「倒錯した快感」が訪れる。自身からは「後頭部」しかみえない石狩を、直接に眺めるのではなく麻子の眼を通じて眺めようとする。このとき「私」は麻子の「眼にのりうつ」り、石狩の「体臭」を感じとっているが、「襟あか」を見て「体臭」を感じるように、視覚が他感覚を圧倒するように特権化されているのだ。屠殺業者の眼を想像した時には「嘘」として切り捨てた行為を、ここでは意識せずおこない、「倒錯した快感」を抱く。麻子は「私」に「のりうつ」られることで「ぎよつとした」のである。

もちろん「私」が実際に麻子の視線を奪い取り視覚情報をそこから得た、といった訳ではない。自分自身の「ある確実な何か」を持たない眼から、「体臭」を嗅ぎ取るような親密な距離感を内包した麻子の視線へと、「私」のもののみかた、眼のありようが切り替えられたのである。麻子が「私」のほうをみたのは偶然で

しかあり得ないが、「私」はその偶然を、自身の視線の「のりうつ」の証左として解釈し、「ぎよつとした」と意味づける。

「囚日」において偶然性に振り回された「私」は、「偽卵」においては偶然を都合良く解釈して視線の「のりうつ」り、すなわち世界の眺めかたの転換へと利用しているのだ。「囚日」で繰り返された自他の境界線の更新は、「偽卵」では他者の視線への「のりうつ」りという形へ変形している。境界線を設定することによって自他を切り離すのではなく、むしろ他者の世界把握をそのまま引き受けて内面化することにより、「ある確実な何か」を掴み取ろうとするのである。

視線の「のりうつ」りを成立させるために、「盲人」の石狩の母親は作品から排され、石狩を強く見つめる麻子というキャラクターが配置されている。偶然による結合とそれを乗り越えるための「嘘」という相剋関係が「囚日」では成り立っていたが、「偽卵」ではそこに視線という要素が導入され、偶然性とそれを支えるための「嘘」という共犯関係へと更新されているのである。

こうして麻子の視線へと「のりうつ」ることに成功した「私」は、次に、「――石狩はなにを見てゐるのだらう？」と考えることで石狩にも「のりうつ」ろうと試みる。

だが、麻子の時のような「倒錯した快感」はおとずれず、「私」自身の視界に「ごくありふれた退屈な風景」がうつるのみである。「私」と石狩のあいだには「膜のやうなへだたり」が残り、「私」の試みる石狩視点の描写は「退屈」、すなわち「嘘」としてしか表現できない。

これが「退屈な風景」としてうつるのは、「私」が石狩の視線

に「のりうつ」ることに失敗しているからである。そのことに、「私」は法廷から出て麻子と歩きながら思い至る。

ある衝動におされて、私は頭を廻し、公園の方を眺めた。白く褪色した樹々の葉や便所の壁を。ハッ手の葉がそこに垂れてゐた。その風景が急に活き活きした感じとして私をうつた。平凡であればあるだけその感じは私を瞬間かきたててきた。

——これだな。こんな感じなんだな！

私は自分の心にきりきりと爪をたてながら思った。この風景を、裁判長の前に立つた石狩が見てゐたことが、その時私の胸にあつた。

「私」が「膜のやうなへだたり」と感じていたものは、石狩と「私」とのあいだにあった何ものかではなく、「私」と風景とのあいだにあった「白くよごれ」た窓硝子である。法廷から出、窓硝子を通さず直接風景を見た「私」は、「これだな。こんな感じなんだな」と、その光景を石狩の「見てゐた」ものとして捉えている。時間差をおいて石狩の視線に「のりうつ」ったかのように、「私」は風景を「活き活きした感じ」としてみている。

だが「私」が麻子の視線に「のりうつ」り石狩を眺めた時と、この場面とは、性質が異なっている。視線の「のりうつ」りは、偶然を基点として成立していた。「私」が麻子の立場に共鳴するかのように石狩の「体臭」をみたのも、麻子が「私」を振り返ったのも、はじめから意図された行為ではなく、偶然に発生したことであった。それを「私」は、偶然を介さないひとつの技法として

応用し石狩の視線に「のりうつ」ろうとしているのである。そもそも石狩が法廷から眺めていたのは、窓越しの風景でしかなかった。それを「私」は変質させ、直接に眺めた風景を石狩の「見てゐた」そのものとみなす。「私」にとって重要なのは、見る側に「ある確実な何か」が存在するということであって、見られる側の確実性は等閑視される。「ある確実な何かで眺める」というその視線の権力性によって、見られる側の存在の意味は常に浮動するのである。

これにより、視線の「のりうつ」と偶然性とが分離する。だがかえって「私」は「ある確実な何か」から一層隔てられてしまう。麻子と別れマーケットで一人飲み始めた「私」の「想念」のなかにそれは表出している。

ほんものの卵を産むためにこんな土偶でも必要だとすれば、と私は酔ひに乱れた頭でかんがへた。本当の感動をうむために、擬似の感動をかさねてゆくことも、無駄ではないだらう。ある確実な何かをつかむためにも、もつともつと馬鹿なことを私はやつて行くのだらう。――

「私」は酔いながら、「みんな馬鹿な鶏みたいに、自分の口から出たことや自分の眼で見たこともはつきり判らないで、やつとその日を生きてゐる」と考える。視線の「のりうつ」りを支えていたのは偶然性だった。それを捨象したことで、「私」の眼は再び、「ある確実な何か」を持たない眼へと、すなわち「自分の眼で見たことはつきり判らない」眼へと差し戻される。作中で重

ねられてきた「のりうつ」りの体験は、「擬似の感動」とみなされ、それらが「本当」でなかったことが意識されるようになる。「もつともつと馬鹿なことを私はやつて行くのだらう」と考える「私」は、声をかけてきた娼婦の女が「私」のマーケットのなかの偽卵を「欲望の形象」、すなわち勃起したペニスと誤解したことを思い出し、「私にふさわしい女かも知れない」と考える。卵と見間違えて偽卵を買った「私」の認識の不確かさと、女の誤解とが重ね合わされ、「ふさわしい」という評価が引き出されているのだ。他者のなかの「ある確実な何か」を「のりうつ」りによって獲得する試みは、偶然性を失ったことで失敗する。だがここでは、見間違ひや誤解などの「擬似」のものを積み重ねていくことが、「ある確実な何か」へと至る新たな手段として提示されているのである。

「囚日」では、自他を正常／異質として線引きしようとする試みながらも失敗する「私」が描かれていた。その失敗を受けて「偽卵」では、複雑化した構造があらわれている。「私」のなかに「ある確実な何か」が欠落していることが明らかにされ、「私」はそれを獲得するために、視線の「のりうつ」りを行うことで自他の境界線を容易に飛び越える。「囚日」で線引きを正統づけていた「この世の掟や約束」というイデオロギーは視線の権力性によって代替され、自他の境界の代わりに見る／見られるという構図が用意される。言うなれば、「他からはどう見えるか」という社会規定的な境界線という設定が、「私」が何をどう「眺める」か、という自己決定的な構図という設定へと更新されているのである。

ただし、「偽卵」が「ある確実な何かをつかむ」ことに失敗し

たまま終わることには着目せねばならない。ここまでの考察を視座として、「気持や条件を裏返し」た「黄色い日日」を検討してみたい。

4、「黄色い日日」——社会規定的構図

「囚日」「偽卵」と「黄色い日日」を見比べた時、まず指摘すべきなのは、この作品が三人称で描かれることだろう。主人公は「彼」として設定されており、「偽卵」に見られたような語りを巻き込んだ偶然性の利用は「彼」には許されていない。

また、タイトルの「黄色い日日」は、黄痘の「彼」の眼にうつる全てのものが黄色く染まっていることからきている。つまり、この作品の主人公は最初から、「ある確実な何かで眺める」という視線の可能性を剥奪されているのである。「彼」は、「視界をおおう黄色の膜」越しに世界を眺めざるを得ない。

物語は、「彼」が隣家の犬に靴を盗まれるのを、ただ「ぼんやり眺めて」いるところからはじまる。「彼」は「食欲の減退」、「風邪をひいてゐる気配」、嘔吐感、発熱、黄痘、そして「気持がほとんど揺れ動」かないという「不透明な虚脱感」にとらわれている。原因として、「どぶ」のような「防火用の水溜り」に落ちたことが挙げられており、およそ肝炎のような症状を発症している。

「彼」は、「あの水溜りに落つこちたのは、酔ひに足をとられたのではなくて、中山が突き落としたのかも知れない」と考える。その晩「彼」は、「週間雑誌の編輯」をしている中山と酒を飲みながら、強盗を働いた友人の三元のことを話し合っていた。中山

は、三元が強盗をおこなったのは「彼」の「影響」か「暗示」か、ともかく「彼」の教唆によるものだと考えている。

主人公の「彼」が病による「鈍麻」にとらわれている代わりに、この中山が、「囚日」「偽卵」の「私」に対応する行動を担うように設定されている。「彼」と中山は、三元の精神鑑定を依頼するために「M精神病院」へと向かうが、中山はその時のことを自身の雑誌に「精神病院見学記」として次のように記す。

「……またある患者によつては、すでに感情生活の変化の最初期に、感興がうすれ、周囲に対する関心と愛情とが減じてゆくのを異様に感じ、悲しみを感ずる事例もあると言ふ。自己が現実世界から徐々に隔てられてゆくやうに実感するのである。（中略）しかし私達はこれらの人々を、精神病患者として突つばねて考へて見ることが出来るだらうか。私達は自分の内部を、自分の周囲を眺めたとき……」

木村はこの部分から、「精神病患者」と「彼」との位置が近いことを指摘している。実際、感情が「鈍麻」した「彼」は、ほとんど記述に一致している。また、中山が撮った「彼」の写真が、あたかも「精神病患者」の写真であるかのように記事に使用されていることも、木村の論考に沿う要素として挙げられるだろう⁶。だが、ここで重要なのは、「囚日」のように「精神病患者」を語り、「偽卵」のような視線の権力性を写真機によって体現する中山の記事について、「彼」が「おれがあそこで感じたことを、中山は全然感じてゐないやうだし」（中山がここに書いてゐるやうなことを、

おれは見もしなかつたし、感じもしなかつた」と考えることではないだろうか。

つまり、「囚日」「偽卵」で積み上げてきた「ある確実な何か」への経路をここでは中山に付託し、「彼」によって改めて揺さぶりをかける仕掛けが施されているのである。

中山が精神病患者を観察していたとき、「彼」が「M精神病院」で見っていたのは、案内された「脳の手術室」と、偶然すれ違ふこととなった「麻痺性痴呆の病名をもつて、A級戦犯から除外された男」のふたつであつた。

「彼」と中山は、病院見学の最初に手術室へと案内され、そこで「頭蓋に穴をあけるための」ドリルや、「前頭葉の組織を切り離す」ためのメスを見せられる。それを見ながら「彼」は、「人間の、考へたり感じたりする実体が、それらの部分を金属のメスで手探りされたり切離されたりする時、その実体そのものは何を考へたり感じたりしてゐるのだらう」と考える。そして、「それは疑問としてではなく、ある不気味な実感として」体得される。また「彼」は、病院内で「痩せた背の高い男」とすれ違ふ。

（あいつはたすかつたんだな、あいつは）

それは麻痺性痴呆の病名をもつて、A級戦犯の法廷から除外された男であつた。この男がM病院に収容されてゐることは知つてゐたし、直線道路の彼方にその姿を見たとき、彼はすぐその男であることを直覚した。

この記述によって、男が大川周明であること、そして「M精神

病院」が東京都立松沢病院であることが読者に伝わるようになってゐる。そして、「彼」が体験したこのふたつの出来事が、二重写しになつて「彼」の「感じたこと」を形作つてゐることが重要なのである。

手術室で感じた、切り離される脳は「何を考へたり感じたりしてゐるのだらう」という「実感」は、「A級戦犯の法廷から除外された男」によつて体現されている。つまり、「何を考へたり感じたりしてゐるのだらう」ということは、戦中思想的指導者の立場を担いながら戦後精神異常として「法廷から除外」された大川周明への問いかけとしても機能するのである。

その問いかけが「彼」に「実感」として響くのは、中山が「彼」を精神病患者として記事に取り上げること、および「彼」の教唆によつて三元が強盗に至つたと考えていることと無関係ではない。

中山をふくめた人物や事象は、平面的な模様として彼の心をへだたつてはゐたが、それらはまた漠然たる復讐の気配をふくんだ構図で、同時に彼に対してゐた。心身の変調を覚えてゆけばそのやうな壁につき当たつてゐるやうであつた。

「囚日」「偽卵」の「私」の位置を引き受けている中山の行動は、「彼」には「復讐の気配をふくんだ構図」として意識されている。その「復讐の気配」は、三元の強盗事件に対する復讐でありながら、結果的には「彼」を「A級戦犯の法廷から除外された

男」と同じ構図へと押し込めるのだ。「囚日」でみられたような犯罪者と精神病患者との結びつけは、「黄色い日日」においては精神病患者と「A級戦犯」の結びつけとして表れる。そして、精神が「鈍麻」している「彼」、三元に強盗を教唆したと見なされた「彼」は、その構図へと回収されてしまうのである。

最後に、「偽卵」でたどり着いた、「ある確実な何か」という問題について考えてみたい。以下の引用は、「彼」が「東京裁判の実況放送」を聴く場面である。

「デス・バイ・ハンギング」

「デス・バイ・ハンギング」

ぶらりとぶら下つた人間の姿が眼の前に見えるやうぢやないか、と彼は心の中でつぶやいた。しかしその言葉の重さは、それだけでなかつた。なにか言ひようのない拡がりを、その言葉は持つてゐた。肉声を殺した機械音であつたから、なほのことその感じは強かつた。それは沢山の人を殺し、彼自身の内部のものを殺した兇暴な風の、ひとつの帰結点の位置で発音されてゐた。

(このやうな実質のある重い言葉を、どんなに長い間おれは聞かなかつただらう?)

「偽卵」における「ある確実な何か」は、ここでは「彼自身の内部のもの」に相当している。それは「兇暴な風」、すなわち戦争によって「殺」されてしまったものとして描かれ、その空白は取り戻されることも、説明されることもない。代わりに、「デス・

バイ・ハンギング」という言葉の「重量と実質」とが、「ひとつの帰結点」として、その空白に反響するのである。

「黄色い日日」は三人称小説という形態をとることによって、「囚日」「偽卵」とは逆に、境界設定のイデオロギー性や視線の権力性に晒される主人公を造型していた。「囚日」「偽卵」の主人公をそのまま引き継ぐのではなく、むしろ問いなおすような主人公「彼」を作中に導入した「黄色い日日」は、梅崎の意図の通りに、「気持や条件を裏返し」にすることには成功しているといつていいだろう。

だがその形式の転換は、作品内に「A級戦犯」や「東京裁判」といった戦争責任の問題を呼び込むことにも繋がった。イデオロギーを背景とした社会、規定的な境界線の意識から出発し、偶然性に支えられて到達した自己決定的な構図という認識は、「黄色い日日」においては複合的な、社会規定的な構図、という社会把握へと更新される。作品に表れるイデオロギー性は、精神病患者や障碍者への差別意識にとどまらず、戦争責任という要素を付加されたことでより強固なものとなっている。

また、いずれの作品でも主人公の内部に「ある確実な何か」に類するものが芽生えることはない。それどころか「ある確実な何か」はむしろ、作品に「A級戦犯」や「東京裁判」が介入したために、「殺」された「彼自身の内部のもの」として処理されてしまい、現状での獲得可能性を断たれてしまっている。

この空白が、梅崎に「自分が信じられなかつた」と言わせたものの正体なのであり、「黄色い日日」で試行された形式の変更にそれに伴うイデオロギー強化の様相こそが、梅崎に「別の迷路」

を予感させ、「材料を放棄すること」へといざなうのである。

注

(1) 梅崎春生『ルネタの市民兵』(月曜書房 一九四九年一月)。なお、本稿はこれに掲載されているあとがきを結節点として構成されているため、本文引用はこれに拠った。

(2) 戸塚麻子『戦後派作家 梅崎春生』(論創社 二〇〇九年七月)。

(3) 木村功『メランコリーの光学——梅崎春生における鬱病の病理とその言語表象』(『敍説Ⅱ』二〇〇四年八月)。

(4) 小説作品における偶然性について、真銅正宏は『偶然の日本文学 小説の面白さの復権』(勉誠出版 二〇一四年九月)のなかで、「小説空間と日常空間の差異は、端的に言えば、日常空間が偶然的世界であるのに対し、小説が、作者を持つ、必然的世界である点にある」と規定し、「小説の偶然は、すべて作者の手によって編まれる必然的なものでもある」と述べている。本稿における偶然にまつわる議論は、基本的に真銅と立場を同じくしている。だからこそ、作中の偶然を論じることが作者の苦悩を明らかにすることへ通ずるのである。

(5) 「囚日」「偽卵」において、強盗をおこなった登場人物は石狩と名指されていた。「黄色い日日」においてはそれが、三元とされている。これについて論者は、作中麻雀が登場することを鑑み、三元牌から採ったものだと考えている。三元牌は白・発・中からなるが、それぞれ白木・発田・中山がその字を宛がわれている。こうした言葉遊びを梅崎は好んでいた。例えば、「Sの背中」の登場人物を猿蟹合戦から名付け、「群像」の月評で取り上げられた際に誰にも見抜かれなかったことを得意がっていた、というエピソードが残されている(梅崎恵津 他『幻化

の人 梅崎春生』東邦出版社 一九七五年八月)。

(6) 中山が撮影をする際、その写真機に「黄色いフィルター」がかかっていたことは示唆的である。視線の権力性を写真機によって獲得したはずの中山が結局「彼」の眼と同じく黄色いフィルター越しに撮影する、という構造もそうだが、さらに言うならば、この「黄色いフィルター」はシャープカットフィルターと呼ばれる白黒撮影用のフィルターであるからだ。中山は「彼」の顔を「夏蜜柑」のように黄色い、としきりに指摘しながら写真機の用意をするが、そうして撮影されるのは色の無い白黒写真なのである。

(わたなべゆうた 立教大学文学研究科博士後期課程)